

実践レポート 探究の窓

VOL.5

2022年度からスタートした「総合的な探究の時間」。
現場で試行錯誤が続くなか、
実践のヒントとなる探究の事例をご紹介します。

興味・関心を起点に

探究を通して視野を広げ、

地域や社会に目を向ける

長野高校（長野・市立）

School Data

1919年創立／総合学科／生徒数
467人（男子246人・女子221人）
／進路状況（2024年3月卒業）大
学102人、短大10人、専門学校34
人、就職2人、そのほか9人

自分自身の興味・関心から
出発し、WIIIを耕す

長野市立長野高校の「翼プロジェクト」
は、1年次の「産業社会と人間」（総合学科
の原則履修科目）と2年次の「課題探究プ
ログラム（Ⅱ総合的な探究の時間）」を貫
くかたちで行われる探究学習。1年次は

年間スケジュール

1年

「産業社会と人間」で 自分自身のWIIIを耕す

前半は、大学での学びや学問に触れつつ、自分の
進路や生き方について考える。夏休みにはボランテ
ィア、インターンシップ、オープンキャンパスのいづれ
かに参加。後半は、2年次の課題探究に向け、自分
の興味・関心を出発点にテーマ設定に取り組む。

2年

「課題探究プログラム」で マイプロジェクトを追究する

問いを立て、情報や資料を収集。夏休みには「探究
アクション①」（見学・体験、調査、実験、インタビューな
ど）に取り組む。中間報告会を経て「探究アクション
②」に取り組み、仮説の実証、分析を行う。最後は「翼
プロジェクト発表会」で発表し、エッセイを執筆する。

「わたしの探究、わたしを探究」。2年次は
「未来にはばたくマイプロジェクト」をサブ
タイトルに掲げ、生徒が自己の未来を創造
し、生涯を通して進路を切り拓いていく力
を身につけることを目指している。

1年次の「産業社会と人間」の前半は、
自分の進路や生き方について考えたり（キ
ャリアプロジェクトⅠ）、大学での学びや学
問に触れたり（キャリアプロジェクトⅡ）する
フェーズ。学期中は、「コミュニケーション講
話やマインドマップの作成を通して社会への
関心や自己理解を深める。夏休みにはボ
ランティア、インターンシップ、オープンキャ
ンパスのいずれかに参加。9月に行われる
大学の模擬講義や進路研修旅行を挟み、
10月には自身の夏休みの体験を発表する。
後半は、2年次の「課題探究プログラム」
に向けた助走期間「キャリアプロジェクトⅢ」
に携える教育系企業による課題設定のた
めのワークショップやオンラインでのメンタリ
ングなどを通して、生徒は自分が取り組む
たいテーマを絞り込んでいく。「大事なのは、
こうありたい、こうしたいという生徒自身の



写真左から、「課題探究プログラム」を担当する山
岡 翠先生、総合学科主任で「翼プロジェクト」を
企画・運営する永池航太郎先生。

「翼プロジェクト係」の設置で 生徒主体の探究活動に

続く2年次の「課題探究プログラム」は、
個人探究でもグループ探究でも可とし、探
究テーマごとに9つの分野に分かれてゼミ形
式で学びを深めていく。分野の設定は、生徒
たちが挙げたテーマにより年度ごとに更新
している。例えば、今年度はまちの活性化や
高校生の居場所づくりなど地域に関わるテ
ーマを選んだ生徒が多く、昨年度まではな
かった「まちづくり」の分野を設けた。

各分野には「チューター」と呼ばれる教員
（その分野に近い教員）が2名ずつ付
き、15〜20名ほどの生徒の探究に伴走する。
当初はチューターが中心になって授業を行っ
ていたが、昨年度からは分野ごとに2名の
生徒を「翼プロジェクト係」に任命し、係の
生徒が中心となって進める方法にシフトし
た。「課題探究プログラム」を担当する山岡



月1回の「翼プロジェクト通信」を発行するのも翼プロジェクト係の役割。分野ごとに持ち回りで担当し、プロジェクトの進捗や具体的な取組などを生徒目線で発信している。



担当チューターとの面談用のワークシート。「探究テーマ(問い)」「仮説or最終目標」「仮説を証明するためor目標達成のために必要な情報・すべきことは何か」「具体的な計画」について書き出し、面談に臨む。



夏休みの探究アクション①に先立ち、ワークショップを実施。一般社団法人HLABの大学生から、インタビューや取材の方法を学ぶ。



翼プロジェクト発表会にて学校代表に選出された生徒は、長野県総合学科高校合同課題研究発表会で発表する。2023年度は、信州の伝統野菜の栽培・普及をテーマに課題探究に取り組んだ生徒が選ばれ、発表した。

担当チューターが伴走する。「難しいのは、自分の興味・関心から深みのある問いを立てること」と永池先生。「調べたらすぐに答えが出る問いでは探究にはふさわしくないし、検証可能な問いにする必要がある。そこに苦戦する生徒は少なくない」と述べる。夏休み(7・8月)には、「探究アクション①」として、見学・体験・調査・実験、インタビューなど、何らかのアクションを起こすことを課している。「視野を広げるためにも、

翠先生は「生徒が前に立つことで、みんなできる、という雰囲気が出てきた」と言う。「授業前の昼休みに係の生徒に集まってもらい、私からその日の授業の資料を渡してやることや伝えることを説明します。立候補者がいる分野はその生徒に、いない分野はこちらから指名して係をやってもらっています。もともと説明が上手な生徒もいればそうではない生徒もいますが、だんだん緊張しなくなった。うまく説明できるようになった、自信がついた、いい経験になったと成長を感じているようです。こちらから見ても、係の生徒の成長はもちろん教室にも一体感が生まれて、主体的に取り組む姿勢が育まれていると感じます」(山岡先生)

自らアクションを起こし、体験を通して情報を集める

「課題探究プログラム」では、「①興味・関心 ②協働・対話 ③アクション・発信」を3本柱としている。4～6月は、1年次の後半で絞り込んだ探究テーマから問いを立て、情報や資料を収集。単なる調べ学習ではなくテーマを掘り下げる探究学習になるよう、チューターが伴走する。「難しいのは、自分の興味・関心から深みのある問いを立てること」と永池先生。「調べたらすぐに答えが出る問いでは探究にはふさわしくないし、検証可能な問いにする必要がある。そこに苦戦する生徒は少なくない」と述べる。夏休み(7・8月)には、「探究アクション①」として、見学・体験・調査・実験、インタビューなど、何らかのアクションを起こすことを課している。「視野を広げるためにも、

学校の外に出てアクションしてほしい」と永池先生。電話やメールで相手に連絡し、アポイントメントを取るところからすべて生徒が行う。夏休み前には外部の提携先の協力のもとインタビューや取材に備えるワークショップを開催し、夏休み明けにはミニ報告会を行い生徒同士で意見を交わし合う。10月には各分野の専門家を交えた中間報告会で現状を報告し、そこで得たフィードバックをもとに内容をブラッシュアップ。「探究アクション②」として再びアクションを起こし、仮説の実証・分析を行う。12月半ばに行われる「分野別発表会」で全員が発表し、1年間の活動を振り返って「探究エッセイ」を執筆。1月末には、各分野の代表者や併設校である長野市立長野中学校の代表者が発表する翼プロジェクトの全体発表会が行われ、集大成を迎える。「発表会の運営も、翼プロジェクト係が中心になって行います。全体発表会では1年生や中学生が2年生の発表を見る機会があり、探究学習に主体的に取り組む姿勢が先輩から後輩へと受け継がれていると感じます」(山岡先生)

なお、全体発表の後には、進路選択に向けたグループワークや志望理由書の執筆など、探究の取組を進路につなげる時間となっている。

高大連携を強化し、科学的なものの方・考え方を育てる

主体的に探究に取り組む土壌ができてくる市立長野高校だが、課題もある。「調査や分析において裏付けとなるデータ

や証拠に乏しく、分析や考察も甘く、科学的な視点が浅い。そのあたりがまだまだ」と山岡先生。こうした課題を受け、今年度から1年後後半に新たに組み込むのが「サイエンティフィックアプローチ」だ。同校は文部科学省の高等学校DX加速化推進事業(DXハイスクール)に採択されており、信州大学、長野工業高等専門学校との連携により、データサイエンスやAIなどについて学ぶ時間を13時間分設ける。10・11月に実施予定で、永池先生、山岡先生は大きな期待を寄せている。

また、同校ではこれに先立って高大連携・高大接続の取組が進んでおり、3年生のうち早期進路決定者を対象にした分野別の特別編成授業を実施。長野県立大学、長野保健医療大学、清泉女学院大学などと連携し、大学での探究的な学びに備えるゼミ形式の授業を行っている。「中高・高大といった縦のつながり、地域との協働や外部連携といった横のつながりが広がり、具体的なアクションも生まれています。例えば、信州の伝統野菜を栽培するプロジェクトが先輩から後輩に引き継がれたり、地域の高齢者向け施設と協働して高校生が放課後に過ごせる場所をつくったり、土砂災害の被災者と対話する座談会を開いたり、学外のマイプロジェクトアワードに挑戦したり。課題探究を通して生徒の意外な側面が見えるなど、私たちとしても気づきが多いです。今後は、科学的なものの方・考え方を育てることに注力しつつ、生徒同士の学び合いがさらに深まるような仕掛けも考えていきたいです」(永池先生)

また、同校ではこれに先立って高大連携・高大接続の取組が進んでおり、3年生のうち早期進路決定者を対象にした分野別の特別編成授業を実施。長野県立大学、長野保健医療大学、清泉女学院大学などと連携し、大学での探究的な学びに備えるゼミ形式の授業を行っている。「中高・高大といった縦のつながり、地域との協働や外部連携といった横のつながりが広がり、具体的なアクションも生まれています。例えば、信州の伝統野菜を栽培するプロジェクトが先輩から後輩に引き継がれたり、地域の高齢者向け施設と協働して高校生が放課後に過ごせる場所をつくったり、土砂災害の被災者と対話する座談会を開いたり、学外のマイプロジェクトアワードに挑戦したり。課題探究を通して生徒の意外な側面が見えるなど、私たちとしても気づきが多いです。今後は、科学的なものの方・考え方を育てることに注力しつつ、生徒同士の学び合いがさらに深まるような仕掛けも考えていきたいです」(永池先生)

まとめ

市立長野高校の探究のモットー

自分の興味・関心を起点に、Willを耕す。
学校から飛び出し、アクションを起こす。

#興味・関心 #協働・対話、学び合い #アクション・発信

自分の興味・関心を 出発点に、テーマを選定

課題設定の出発点は、自分の興味・関心。1年次は提携する(株)トモノカイによる課題設定のためのワークショップやオンラインでのメンタリング、2年次はチューターとの対話などを通して、テーマを絞り込み、問いを立てていく。

自らアクションを 起こして情報を集める

書籍やインターネットの知識・情報だけでなく、専門家へのインタビュー、取材、見学・体験、調査、実験などのアクションを通して情報を集める。事前に、一般社団法人HLABの協力のもと、インタビューや取材の方法をワークショップ形式で学ぶ。

課題の 設定

情報の 収集

まとめ・ 表現

整理・ 分析

取組・成果をまとめて 発表し、エッセイを書く

中間報告会、分野別発表会と発表の機会が2回あることで、探究のサイクルも2周回る。分野の代表者は、中高合同で行われる翼プロジェクト発表会でも発表。最後は探究活動を振り返り、エッセイを執筆する。

集めた情報を分析し、 探究サイクルを回す

アクションを通して得られた情報を整理・分析し、中間報告会で報告。専門家からのフィードバックをもとに分析や考察を深めつつ、見えてきた課題に対して2回目のアクションを起こすことで探究がブラッシュアップされる。

探究設計のPOINT

POINT ① アクションの機会を2回設け、
探究サイクルの回転率を上げる

POINT ② 中間報告会で専門家から助言・
意見をもらい、考察を深める

POINT ③ 外部との連携を進め、
多様な学びの機会を設ける

評価基準

- プレゼンテーションやポスター発表などによる評価
- 報告書・レポート・エッセイなどの制作物による評価
- 評価カードや学習記録などによる生徒の自己評価や相互評価

「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点から上記を総合的に評価し、チューターがA～Cの評価をつける。